令和 7 年度 実験レポート

~2 軸ロボットの運動制御実験**~** Quanser 題目 Consulting 社製 2軸ロボット

学		科	電気電子システム工学コース
学籍	鲁番	号	a0527
氏		名	野口 史遠
提	出	日	令和 7 年 5 月 12 日



舞鶴工業高等専門学校

目 次

第 1 章 概要	1
第 2 章 順運動学と逆運動学	2
2.1 運動方程式	2
2.2 逆運動学	2
2.3 順運動学	7
第 3 章 アクチュエータ, センサの動作確認	11
3.1 実験内容	11
3.1.1 2軸ロボット実験装置におけるアクチュエータとセンサ	11
3.1.2 D/A 変換とアクチュエータの動作確認	11
3.1.3 実験装置のセッティングと MATLAB /Simulink の起動	11
3.1.4 モデルの移動と結線	12
3.1.5 Simulation Parameters のパラメータ設定	13
3.1.6 コンパイル	13
3.1.7 実験	14
3.1.8 A/D 変換とセンサの動作確認	15
3.2 実験結果	15
3.2.1 D/A 変換とアクチュエータの動作確認	15
3.2.2 A/D 変換とセンサの動作確認 ····································	15
3.3 考察	16
第 4 章 時間応答に基づくパラメータ同定 ······	17
4.1 実験内容	17
4.1.1 パラメータ同定の手順	17
P コントローラ	17
4.2 実験結果	19
4.3 考察	19
第 5 章 角度制御	20
5.1 実験内容	20
5.1.1 P 制御	20
5.1.2 パラメータ設定	20
5.1.3 シミュレーションと実験	20
5.1.4 P-D 制御 ······	22
5.1.5 パラメータ設定	22
5.1.6 シミュレーションと実験	23

5.1.7 I–PD 制御 ···································	24
5.1.8 パラメータ設定	24
規範モデルの標準形	25
5.1.9 シミュレーションと実験	25
5.2 実験結果	27
5.3 考察	28
第 6 章 手先位置制御	29
6.1 順運動学と逆運動学	29
6.2 シミュレーションと実験(目標値が一定値の場合)	30
6.3 シミュレーションと実験 (目標値をデータで与える場合)	33
6.3.1 目標値の与え方	33
6.3.2 デモンストレーション	34
第 7 章 ダイレクトティーチング	37
7.1 実験内容	37
7.1.1 手順	37
7.1.2 教師データの取得	37
7.1.3 シミュレーションと実験	38
7.2 実験結果	38
7.3 考察	39

第1章 概要

図 1.1, 1.2 に示す 4 リンク 2 軸ロボット実験装置は、ギアを介して軸 P_1 , P_5 に取り付けられた 2 つのモータにより手先の位置 P_3 を目標位置に追従させることを目的とした実験装置である.このことを実現するためには、手先位置からモータの回転角度を求める逆動力学とモータの回転角度 から手先位置を求める順動力学を理解する必要がある.

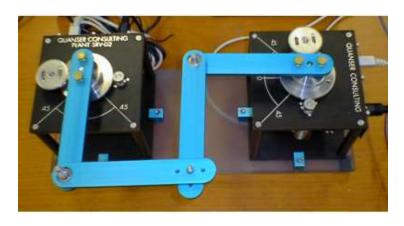


図 1.1: 4リンク 2軸ロボット実験装置(型番:55023)

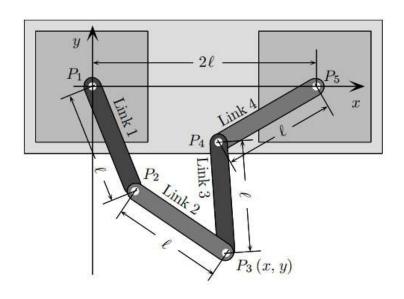


図 1.2: 4つリンクの関係

第2章 順運動学と逆運動学

2.1 運動方程式

リンク 1 を手で基準位置から回転させてリンク 1 の基準位置からの回転角 $\theta_x(t)$ がさほど大きくなければ、リンク 4 は静止したままである.したがって、 P_1 , P_5 の角度 $\theta_x(t)$, $\theta_y(t)$ がその基準角度の近傍で動作するとすると、リンク 1 とリンク 4 との干渉は無視できる(実際、リンク 1 あるいはリンク 4 を手で微小回転させてもリンク 4 あるいはリンク 1 は静止したままである).このとき、リンク 1、リンク 4 の運動方程式は

$$J_x \ddot{\theta}_x(t) = -c_x \dot{\theta}_x(t) + \tau_x(t)$$

$$J_y \ddot{\theta}_y(t) = -c_y \dot{\theta}_y(t) + \tau_y(t)$$
(2.1)

となる. ただし、 $\tau_x(t)$, $\tau_y(t)$ は軸 P_1 , P_5 に加わるトルク、 J_x , J_y はリンク 1、リンク 4 の慣性モーメントであり、 c_x , c_y は軸 P_1 , P_5 の粘性摩擦係数である. また、モータドライバに加える電圧 $v_x(t)$, $v_y(t)$ とトルク $\tau_x(t)$, $\tau_y(t)$ が比例関係

$$\begin{cases}
\tau_x(t) = k_{fx}v_x(t) \\
\tau_y(t) = k_{fy}v_y(t)
\end{cases}$$
(2.2)

にあると仮定すると、

$$J_x \ddot{\theta}_x(t) = -c_x \dot{\theta}_x(t) + k_{fx} v_x(t)$$

$$J_y \ddot{\theta}_y(t) = -c_y \dot{\theta}_y(t) + k_{fy} v_y(t)$$
(2.3)

であるから、 $v_x(t),\,v_y(t)$ から $\theta_x(t),\,\theta_y(t)$ への伝達関数 $G_x(s),\,G_y(s)$ は

$$\begin{cases}
G_x(s) = \frac{b_x}{s(s+a_x)}, & a_x = \frac{c_x}{J_x}, & b_x = \frac{k_{fx}}{J_x} \\
G_y(s) = \frac{b_y}{s(s+a_y)}, & a_y = \frac{c_y}{J_y}, & b_y = \frac{k_{fy}}{J_y}
\end{cases}$$
(2.4)

となる.

2.2 逆運動学

ここでは、手先にあたる軸 P_3 の座標 (x,y) からモータの回転軸 P_1 , P_5 の角度 θ_x , θ_y を求める. このように、手先の座標から回転角を求めることを逆運動学という.

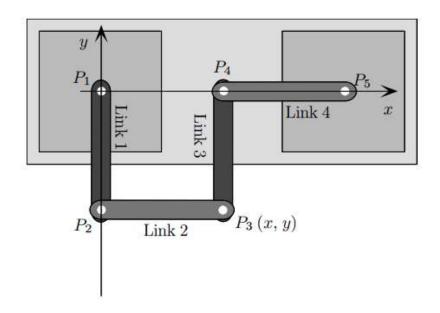


図 2.1:初期位置(基準位置)

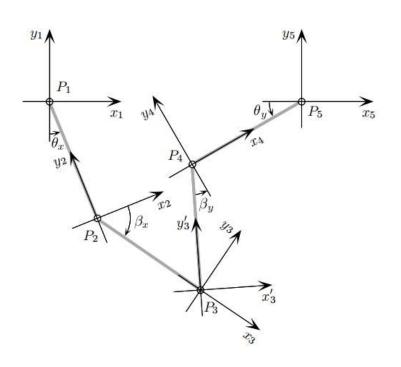


図 2.2: 逆運動学のための各座標系

図 2.2 に示すように,リンク 1,リンク 2 に関しては x_1y_1 座標系と x_2y_2 座標系と x_3y_3 座標系は

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ y_1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \cos \theta_x & -\sin \theta_x \\ \sin \theta_x & \cos \theta_x \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_2 \\ y_2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} \ell \sin \theta_x \\ -\ell \cos \theta_x \end{bmatrix}$$

$$\begin{bmatrix} x_2 \\ y_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \cos(-\beta_x) & -\sin(-\beta_x) \\ \sin(-\beta_x) & \cos(-\beta_x) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_3 \\ y_3 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} \ell \cos \beta_x \\ -\ell \sin \beta_x \end{bmatrix}$$

$$= \begin{bmatrix} \cos \beta_x & \sin \beta_x \\ -\sin \beta_x & \cos \beta_x \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_3 \\ y_3 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} \ell \cos \beta_x \\ -\ell \sin \beta_x \end{bmatrix}$$

$$(2.5)$$

という関係にある. (2.5), (2.6) 式を書き換えると,

$$\begin{bmatrix} x_1 & y_1 & 1 \end{bmatrix}^T = T_{12} \begin{bmatrix} x_2 & y_2 & 1 \end{bmatrix}^T$$

$$\begin{bmatrix} x_2 & y_2 & 1 \end{bmatrix}^T = T_{23} \begin{bmatrix} x_3 & y_3 & 1 \end{bmatrix}^T$$
(2.8)

$$T_{12} = \begin{bmatrix} \cos \theta_x & -\sin \theta_x & \ell \sin \theta_x \\ \sin \theta_x & \cos \theta_x & -\ell \cos \theta_x \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}, \quad T_{23} = \begin{bmatrix} \cos \beta_x & \sin \beta_x & -\ell \sin \beta_x \\ -\sin \beta_x & \cos \beta_x & \ell \cos \beta_x \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$$

となるから、 x_1y_1 座標系と x_3y_3 座標系との間に以下の関係式が成立する.

$$\begin{bmatrix} x_1 & y_1 & 1 \end{bmatrix}^T = T_{13} \begin{bmatrix} x_3 & y_3 & 1 \end{bmatrix}^T, \quad T_{13} = T_{12}T_{23}$$
 (2.9)

(2.9) 式を利用して, x_3y_3 座標系の原点 P_3 を x_1y_1 座標系で表すと,

$$\begin{bmatrix} x & y & 1 \end{bmatrix}^{T} = T_{13} \begin{bmatrix} 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}^{T}$$

$$= \begin{bmatrix} \ell \cos \theta_{x} \cos \beta_{x} + \ell \sin \theta_{x} \sin \beta_{x} + \ell \sin \theta_{x}, & -\ell \cos \theta_{x} \sin \beta_{x} + \ell \sin \theta_{x} \cos \beta_{x} - \ell \cos \theta_{x}, & 1 \end{bmatrix}^{T}$$

$$= \begin{bmatrix} \ell \cos(\theta_{x} - \beta_{x}) + \ell \sin \theta_{x}, & \ell \sin(\theta_{x} - \beta_{x}) - \ell \cos \theta_{x}, & 1 \end{bmatrix}^{T}$$
(2.10)

となる. (2.10) 式より

$$\begin{cases} x = \ell \cos(\theta_x - \beta_x) + \ell \sin \theta_x \\ y = \ell \sin(\theta_x - \beta_x) - \ell \cos \theta_x \end{cases}$$
 (2.11)

$$\Rightarrow \begin{cases} x - \ell \sin \theta_x = \ell \cos(\theta_x - \beta_x) \\ y + \ell \cos \theta_x = \ell \sin(\theta_x - \beta_x) \end{cases}$$
$$\Rightarrow (x - \ell \sin \theta_x)^2 + (y + \ell \cos \theta_x)^2 = \ell^2$$
 (2.12)

であるから, P_3 は中心 $(\ell \sin \theta_x, -\ell \cos \theta_x)$,半径 ℓ の円上を移動することがわかる.(2.12) 式を書き換えると

$$x^2 + y^2 - 2\ell(\sin\theta_x x - \cos\theta_x y) = 0$$

$$\implies x^2 + y^2 - 2\ell\sqrt{x^2 + y^2}\sin(\theta_x + \phi_x) = 0 \quad , \quad \begin{cases} \cos\phi_x = \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} \\ \sin\phi_x = \frac{y}{\sqrt{x^2 + y^2}} \end{cases}$$

$$\implies \sin(\theta_x + \phi_x) = \frac{\sqrt{x^2 + y^2}}{2\ell} \quad , \quad \theta_x = \sin^{-1}\left(\frac{\sqrt{x^2 + y^2}}{2\ell}\right) - \phi_x \tag{2.13}$$

となる. したがって, P_3 の座標 (x,y) からモータの回転軸 P_1 の角度 θ_x が次式により求まる.

$$\theta_x = \sin^{-1}\left(\frac{\sqrt{x^2 + y^2}}{2\ell}\right) + \tan^{-1}\left(\frac{y}{x}\right) \tag{2.14}$$

同様に、リンク 3、リンク 4 に関して考えると、 x_1y_1 座標系と x_5y_5 座標系、 x_5y_5 座標系と x_4y_4 座標系、 x_4y_4 座標系と $x_3'y_3'$ 座標系は

$$\begin{bmatrix} x_5 \\ y_5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \cos \theta_y & -\sin \theta_y \\ \sin \theta_y & \cos \theta_y \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_4 \\ y_4 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} -\ell \cos \theta_y \\ -\ell \sin \theta_y \end{bmatrix}$$
 (2.16)

$$\begin{bmatrix} x_4 \\ y_4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \cos(-\beta_y) & -\sin(-\beta_y) \\ \sin(-\beta_y) & \cos(-\beta_y) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_3' \\ y_3' \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} -\ell \sin \beta_y \\ -\ell \cos \beta_y \end{bmatrix}$$

$$= \begin{bmatrix} \cos \beta_y & \sin \beta_y \\ -\sin \beta_y & \cos \beta_y \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_3' \\ y_3' \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} -\ell \sin \beta_y \\ -\ell \cos \beta_y \end{bmatrix}$$
(2.17)

という関係にある. (2.15), (2.16), (2.17) 式を書き換えると,

$$\begin{bmatrix} x_1 & y_1 & 1 \end{bmatrix}^T = T_{15} \begin{bmatrix} x_5 & y_5 & 1 \end{bmatrix}^T \tag{2.18}$$

$$\begin{bmatrix} x_5 & y_5 & 1 \end{bmatrix}^T = T_{54} \begin{bmatrix} x_4 & y_4 & 1 \end{bmatrix}^T \tag{2.19}$$

$$\begin{bmatrix} x_4 & y_4 & 1 \end{bmatrix}^T = T'_{43} \begin{bmatrix} x'_3 & y'_3 & 1 \end{bmatrix}^T$$
 (2.20)

ここで各変換行列は

$$T_{15} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2\ell \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \quad T_{54} = \begin{bmatrix} \cos \theta_y & -\sin \theta_y & -\ell \cos \theta_y \\ \sin \theta_y & \cos \theta_y & -\ell \sin \theta_y \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \quad T'_{43} = \begin{bmatrix} \cos \beta_y & \sin \beta_y & -\ell \sin \beta_y \\ -\sin \beta_y & \cos \beta_y & -\ell \cos \beta_y \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$$

となるから、 x_1y_1 座標系と $x_3'y_3'$ 座標系との間に以下の関係式が成立する

$$\begin{bmatrix} x_1 & y_1 & 1 \end{bmatrix}^T = T'_{13} \begin{bmatrix} x'_3 & y'_3 & 1 \end{bmatrix}^T, \quad T'_{13} = T_{15}T_{54}T'_{43}$$
 (2.21)

(2.21) 式を利用して、 $x_3'y_3'$ 座標系の原点 P_3 を x_1y_1 座標系で表すと、

$$\begin{bmatrix} x & y & 1 \end{bmatrix}^{T} = T'_{13} \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

$$= \begin{bmatrix} -\ell \cos \theta_{y} \sin \beta_{y} + \ell \sin \theta_{y} \cos \beta_{y} - \ell \cos \theta_{y} + 2\ell \\ -\ell \cos \theta_{y} \cos \beta_{y} + \ell \sin \theta_{y} \sin \beta_{y} - \ell \sin \theta_{y} \\ 1 \end{bmatrix}$$

$$= \begin{bmatrix} -\ell \cos(\theta_{y} + \beta_{y}) - \ell \cos \theta_{y} + 2\ell \\ -\ell \sin(\theta_{y} + \beta_{y}) - \ell \sin \theta_{y} \\ 1 \end{bmatrix}$$

$$(2.22)$$

となる. (2.22) 式より

$$\begin{cases} x' = x - 2\ell = -\ell \cos(\theta_y + \beta_y) - \ell \cos \theta_y \\ y = -\ell \sin(\theta_y + \beta_y) - \ell \sin \theta_y \end{cases}$$
 (2.23)

$$\Longrightarrow \begin{cases} x' + \ell \cos \theta_y = -\ell \cos(\theta_y + \beta_y) \\ y + \ell \sin \theta_y = -\ell \sin(\theta_y + \beta_y) \end{cases} \Longrightarrow (x' + \ell \cos \theta_y)^2 + (y + \ell \sin \theta_y)^2 = \ell^2$$
 (2.24)

であるから, P_3 は中心 $(2\ell-\ell\cos\theta_y,\;-\ell\sin\theta_y)$,半径 ℓ の円上を移動することがわかる.(2.24)式を書き換えると

$$x'^{2} + y^{2} + 2\ell(x'\cos\theta_{y} + y\sin\theta_{y}) = 0$$

$$\Rightarrow x'^{2} + y^{2} - 2\ell\sqrt{x'^{2} + y^{2}}\sin(\theta_{y} + \phi_{y}) = 0,$$

$$\begin{cases}
\cos\phi_{y} = -\frac{y}{\sqrt{x'^{2} + y^{2}}}\\
\sin\phi_{y} = -\frac{x'}{\sqrt{x'^{2} + y^{2}}}
\end{cases}$$

$$\Rightarrow \sin(\theta_{y} + \phi_{y}) = \frac{\sqrt{x'^{2} + y^{2}}}{2\ell}$$

$$\Rightarrow \theta_{y} = \sin^{-1}\left(\frac{\sqrt{x'^{2} + y^{2}}}{2\ell}\right) - \phi_{y} \qquad (2.25)$$

したがって、 P_3 の座標 (x,y) からモータの回転軸 P_5 の角度 θ_y が次式により求まる.

$$\theta_y = \sin^{-1}\left(\frac{\sqrt{x'^2 + y^2}}{2\ell}\right) - \tan^{-1}\left(\frac{x'}{y}\right)$$
$$= \sin^{-1}\left(\frac{\sqrt{(x - 2\ell)^2 + y^2}}{2\ell}\right) - \tan^{-1}\left(\frac{x - 2\ell}{y}\right)$$
(2.26)

2.3 順運動学

ここでは、モータの回転軸 P_1 , P_5 の角度 θ_x , θ_y から手先 P_3 の座標 (x,y) を求める. このように、回転軸から手先の座標を求めることを順運動学という.

軸 P_2 , P_4 の回転角 β_x , β_y が検出可能であれば (2.11) 式や (2.23) 式により手先 P_3 の座標 (x,y) を求めることができるが、本実験装置は軸 P_2 , P_4 にはセンサが取り付けられていない.そこで、 x_1y_1 座標系、 x_2y_2 座標系、 x_3y_3 座標系を考える代わりに、図 2.3 に示す x_1y_1 座標系、 x_2y_2 座標系、 x_3y_3 座標系を考える.

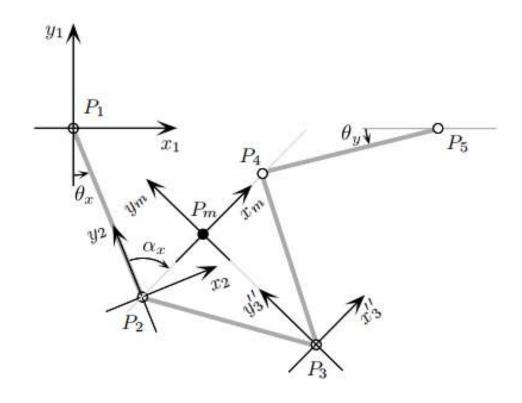


図 2.3:順運動学のための各座標系 1

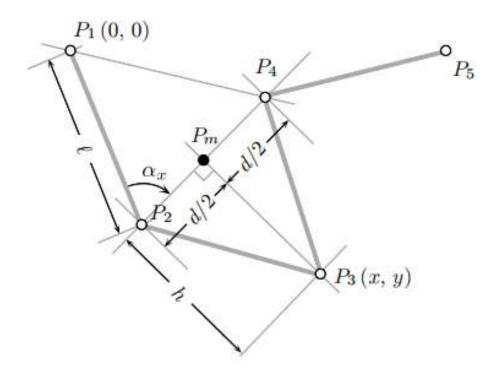


図 2.4:順運動学のための各座標系 2

図 2.3, 2.4 より x_2y_2 座標系と x_my_m 座標系, x_my_m 座標系と $x_3'y_3'$ 座標系は

$$\begin{bmatrix} x_2 \\ y_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \cos\left(\frac{\pi}{2} - \alpha_x\right) & -\sin\left(\frac{\pi}{2} - \alpha_x\right) \\ \sin\left(\frac{\pi}{2} - \alpha_x\right) & \cos\left(\frac{\pi}{2} - \alpha_x\right) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_m \\ y_m \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} \frac{d}{2}\cos\left(\frac{\pi}{2} - \alpha_x\right) \\ \frac{d}{2}\sin\left(\frac{\pi}{2} - \alpha_x\right) \end{bmatrix}$$

$$= \begin{bmatrix} \sin\alpha_x & -\cos\alpha_x \\ \cos\alpha_x & \sin\alpha_x \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_m \\ y_m \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} \frac{d}{2}\sin\alpha_x \\ \frac{d}{2}\cos\alpha_x \end{bmatrix}$$
(2.27)

という関係にある. (2.27), (2.28) 式を書き換えると,

$$\begin{bmatrix} x_2 & y_2 & 1 \end{bmatrix}^T = T_{2m} \begin{bmatrix} x_m & y_m & 1 \end{bmatrix}^T$$
 (2.29)

$$\begin{bmatrix} x_m & y_m & 1 \end{bmatrix}^T = T''_{m3} \begin{bmatrix} x''_3 & y''_3 & 1 \end{bmatrix}^T$$
 (2.30)

$$T_{2m} = \begin{bmatrix} \sin \alpha_x & -\cos \alpha_x & \frac{d}{2} \sin \alpha_x \\ \cos \alpha_x & \sin \alpha_x & \frac{d}{2} \cos \alpha_x \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}, \quad T''_{m3} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & -h \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$$

となるから、 x_1y_1 座標系と $x_3''y_3''$ 座標系との間に以下の関係式が成立する.

$$\begin{bmatrix} x_1 & y_1 & 1 \end{bmatrix}^T = T_{13}'' \begin{bmatrix} x_3'' & y_3'' & 1 \end{bmatrix}^T, \quad T_{13}'' = T_{12}T_{2m}T_{m3}''$$
(2.31)

(2.31) 式を利用して, $x_3''y_3''$ 座標系の原点 P_3 を x_1y_1 座標系で表すと,

$$\begin{bmatrix} x & y & 1 \end{bmatrix}^{T} = T_{13}'' \begin{bmatrix} 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}^{T} \\
= \begin{bmatrix} h(\cos\theta_{x}\cos\alpha_{x} + \sin\theta_{x}\sin\alpha_{x}) - \frac{d}{2}(\sin\theta_{x}\cos\alpha_{x} - \cos\theta_{x}\sin\alpha_{x}) + \ell\sin\theta_{x} \\ h(\sin\theta_{x}\cos\alpha_{x} - \cos\theta_{x}\sin\alpha_{x}) + \frac{d}{2}(\cos\theta_{x}\cos\alpha_{x} + \sin\theta_{x}\sin\alpha_{x}) - \ell\cos\theta_{x} \end{bmatrix} \\
= \begin{bmatrix} h\cos(\theta_{x} - \alpha_{x}) - \frac{d}{2}\sin(\theta_{x} - \alpha_{x}) + \ell\sin\theta_{x} \\ h\sin(\theta_{x} - \alpha_{x}) + \frac{d}{2}\cos(\theta_{x} - \alpha_{x}) - \ell\cos\theta_{x} \end{bmatrix} \tag{2.32}$$

となる. したがって、d、h、 α_x が求まれば手先 P_3 の座標が

$$\begin{cases} x = h\cos(\theta_x - \alpha_x) - \frac{d}{2}\sin(\theta_x - \alpha_x) + \ell\sin\theta_x \\ y = h\sin(\theta_x - \alpha_x) + \frac{d}{2}\cos(\theta_x - \alpha_x) - \ell\cos\theta_x \end{cases}$$
 (2.33)

により求まる.

 x_1y_1 座標系における P_2 , P_4 の座標をそれぞれ (p_{2x},p_{2y}) , (p_{4x},p_{4y}) とすると,

$$\begin{cases}
p_{2x} = \ell \sin \theta_x \\
p_{2y} = -\ell \cos \theta_x
\end{cases}, \quad
\begin{cases}
p_{4x} = 2\ell - \ell \cos \theta_y \\
p_{4y} = -\ell \sin \theta_y
\end{cases}$$
(2.34)

であるから, dは

$$d = P_2 P_4 = \sqrt{(p_{2x} - p_{4x})^2 + (p_{2y} - p_{4y})^2}$$
(2.35)

と定まる.

また、h は三角形 $P_mP_2P_3$ における三平方の定理より

$$h = \sqrt{\ell^2 - \left(\frac{d}{2}\right)^2} \tag{2.36}$$

と定まり、 α_x は三角形 $P_1P_2P_4$ における余弦定理より

$$(P_1 P_4)^2 = \ell^2 + d^2 - 2d\ell \cos \alpha_x$$

$$\Rightarrow p_{4x}^2 + p_{4y}^2 = \ell^2 + d^2 - 2d\ell \cos \alpha_x$$

$$\Rightarrow \alpha_x = \cos^{-1} \left(\frac{\ell^2 + d^2 - (p_{4x}^2 + p_{4y}^2)}{2d\ell} \right)$$
(2.37)

と定まる.

第3章 アクチュエータ、センサの動作確認

3.1 実験内容

3.1.1 2軸口ボット実験装置におけるアクチュエータとセンサ

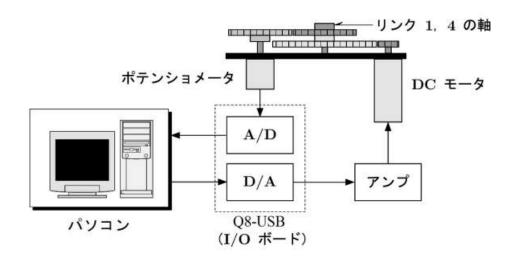


図 3.1: アクチュエータ (DC モータ) とセンサ (ポテンショメータ)

図 3.1 に示すように、2 軸ロボット実験装置はリンク 1、リンク 4 がギアを介して DC モータにより回転するようになっている。 DC モータを駆動させるためにパソコンにより計算された指令電圧は、I/O ボード Q8-USB で D/A 変換された後、アンプを介して DC モータに入力される。また、リンク 1、リンク 4 の回転角は角度センサであるポテンショメータにより電圧値として検出され、I/O ボード Q8-USB で A/D 変換された後、パソコンに取り込まれている。

3.1.2 D/A 変換とアクチュエータの動作確認

3.1.3 実験装置のセッティングと MATLAB/Simulink の起動

図 3.2 に示すように,実験装置の 2 つの軸にそれぞれリンクを取り付ける.また,図 3.3 のようにターミナル,Universal Power Module,2 軸ロボットのケーブルが接続されていることを確認する.ただし,左側の DC モータおよびポテンショメータに対するチャネルを **CH0**(チャネル 0),右側の DC モータおよびポテンショメータに対するチャネルを **CH1**(チャネル 1)とする.

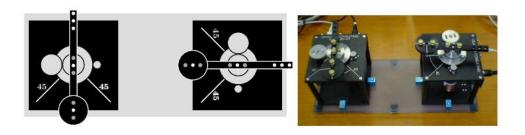


図 3.2: 実験装置

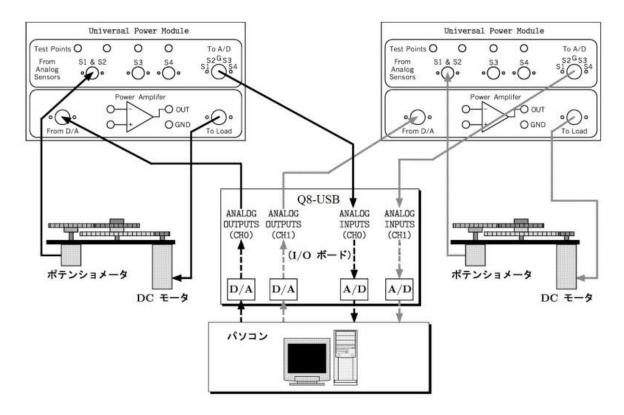


図 3.3: 実験装置の接続

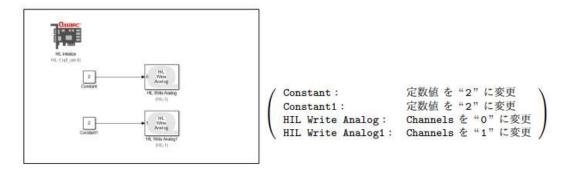
つぎに、Windows スタートメニューより MATLAB R2013a を起動する。MATLAB のコマンドウィンドウ上で以下のように入力し、カレントディレクトリ(作業するフォルダ)を変更する。(Xは自分の班名に置き換える。)

cd D:\student_senkouka\group_X

3.1.4 モデルの移動と結線

左右の DC モータに 2[V] の電圧を加えたときのリンクの動きを調べてみよう。MATLAB の"現在のフォルダー"にある,"da"フォルダーを選択し,"da_conv.slx"をダブルクリックして Simulink モデルを起動する。起動したモデルを図 3.4 のように結線する。また,各ブロックをダブルクリッ

クして、パラメータを変更する。



 \boxtimes 3.4 : da_conv.slx

3.1.5 Simulation Parameters のパラメータ設定

Simulink モデルウィンドウのツールバーから "モデルコンフィグレーションパラメーター" を選択し、"ソルバー"を選択、図 5.1 のようにパラメータを設定する.

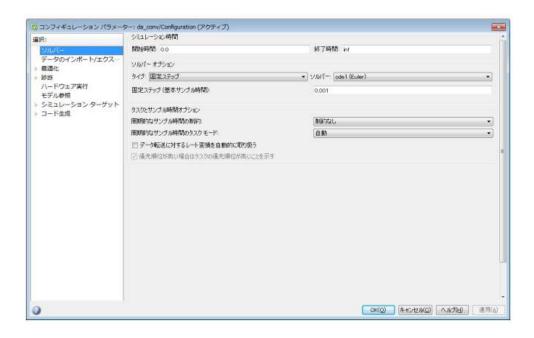


図 3.5: Simulation Parameters のパラメータ設定

3.1.6 コンパイル

Dドライブのディレクトリ(フォルダ)D:\student_senkouka\group_X\da(X は自分の班名)が カレントディレクトリとなっているかどうか確かめる。 カレントディレクトリとなっていない場合 は現在のフォルダーを操作してカレントディレクトリを変更する.



図 3.6: コンパイル

つぎに、"da_conv.slx"をコンパイルするためには、図 3.6 に示すように Simulink モデルのツールバーの右端にあるアイコンをクリック、モデルのビルドを選択すればよい。別の方法としては Simulink モデルのメニューから「QUARC/Build」を選択しても良い。このとき、エラーがなければ MATLAB Command Window に以下のようなメッセージが表示され、コンパイルが終了する.

3.1.7 実験

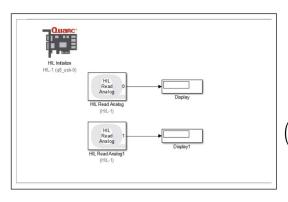
コンパイル終了後,図 3.7 に示すように Simulink モデルのツールバーで "ターゲットに接続" アイコンをクリックし,その右のアイコンの "実行" をクリックすると,モータドライバに一定の電圧 2 [V] が加わり,リンクが一定速度で時計回りに回転することが確認できる.停止させる場合には "実行" アイコンの右にある "停止" アイコンをクリックすればよい.実行の方法として,Simulink モデルのメニューから「QUARC/Start」を選択しても実行ができる.また停止方法として Simulink モデルのメニューから「QUARC/Stop」を選択してもよい.



図 3.7: 実機実験の開始

3.1.8 A/D 変換とセンサの動作確認

本実験装置では、角度センサにポテンショメータを用いている。このポテンショメータは軸の回転角に比例した電圧 $-5 \sim +5$ [V] をアナログ信号として出力し、また、この電圧と軸の回転角との関係は、1 [V] あたり -35 [deg] である。ポテンショメータの動作確認をするために、図 3.8 の実機実験モデル "ad_conv.slx" を作成する.



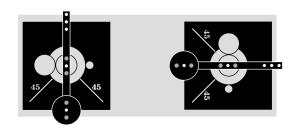
「 HIL Read Analog: Channels を"0"に変更 HIL Read Analog1: Channels を"1"に変更

図 3.8: "ad_conv.slx"

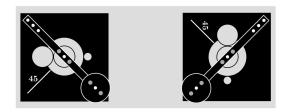
つぎに、図 ?? で示したようにパラメータ設定を行い、図 ?? 節で示したように "ad_conv.slx" をコンパイルする. 以上の準備の下、リンクを図 3.9 (a) の状態にして、"Start" アイコンをクリックすると、センサからの電圧が図 3.10a (a) のように 0 [V] 程度であることが確認できる.

先に述べたように、本実験装置で用いているポテンショメータは、1 [V] あたり -35 [deg](= -0.6109 [rad])であるから、リンクを反時計回りに 45 [deg] = $\pi/4$ [rad] 回転させると -1.2857 [V] の電圧が発生するはずである.

実際, リンクを図 3.9 (b) のように反時計回りに 45 [deg] 回転させると, センサからの電圧が図 3.10b (b) のように -1.2857 [V] 程度であることが確認できる.



(a) 初期状態



(b) リンクを反時計回りに 45 [deg] 回転させた状態

図 3.9: リンクを手で反時計回りに 45 [deg] 回転させた状態

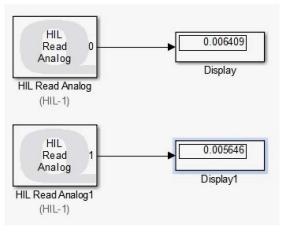
3.2 実験結果

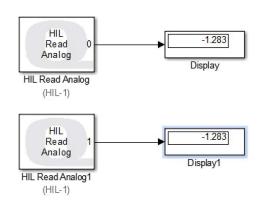
3.2.1 D/A 変換とアクチュエータの動作確認

図 ?? に示すように、DC モータに 2 [V] の電圧を加えると、リンクが時計回りに回転し、リンクの角度 $\theta_x(t)$ 、 $\theta_y(t)$ が弧度法の単位 [rad] で得られることが確認できた.

3.2.2 A/D 変換とセンサの動作確認

図 3.10 に示すように,リンクを反時計回りに 45 [deg] 回転させたとき,センサからの電圧が -1.2857 [V] 程度であることが確認できた.





(b) リンクを反時計回りに 45 [deg] 回転させた状(a) 初期状態態

図 3.10: リンクを手で反時計回りに 45 [deg] 回転させたときの出力電圧

3.3 考察

アクチュエータの動作確認では,正の電圧を DC モータに加えるとリンクが時計回りに回転することが確認できた.また,センサの動作確認では,ポテンショメータが角度に比例した電圧を出力することが確認できた.これにより,2 軸ロボットの動作が正確に制御可能であることが示された.

第 4 章 時間応答に基づくパラメータ同定

4.1 実験内容

4.1.1 パラメータ同定の手順

P コントローラ

$$v_x(t) = k_{Px}(\theta_x^{\text{ref}}(t) - \theta_x(t)) \tag{4.2}$$

によりリンク 1 の関節角 $\theta_x(t)$ を制御したとき、2 軸ロボットの数学モデル(式 (2.4))と仮定すると、 $\theta_x^{\rm ref}(s)$ から $\theta_x(s)$ への伝達関数は 2 次遅れ系

$$T_x(s) = \frac{G_x(s)k_{Px}}{1 + G_x(s)k_{Px}} = \frac{b_x k_{Px}}{s^2 + a_x s + b_x k_{Px}} = \frac{\omega_{nx}^2}{s^2 + 2\zeta_x \omega_{nx} s + \omega_{nx}^2}$$
(4.3)

となる

(4.4) 式から明らかなように、比例ゲイン k_{Px} を大きくすると ζ_x は零に近づくため、ステップ応答はオーバーシュートが生じ、振動的になっていく、そこで、ある程度大きな比例ゲイン k_{Px} を設定し、目標値を

$$\theta_x^{\text{ref}}(t) = \begin{cases} 0 & (t < 0) \\ \theta_{dx} & (t \ge 0) \end{cases} \tag{4.5}$$

としたステップ応答にオーバシュートを生じさせると、最大ピーク値 $\max \theta_x$ と行き過ぎ時間 t_{px} は以下のようになる.

$$\begin{cases}
\max \theta_x = \theta_{dx} \left(1 + \exp\left(-\frac{\gamma_x \pi}{\delta_x} \right) \right) \\
t_{px} = \frac{\pi}{\delta_-}
\end{cases}$$
(4.6)

ただし,

$$\delta_x = \zeta_x \omega_{nx}, \quad \gamma_x = \omega_{nx} \sqrt{1 - \zeta_x^2} \tag{4.7}$$

以上のことから、未知パラメータ a_x 、 b_x の同定手順は以下のようになる. パラメータ同定の手順

- 1. ある程度大きい比例ゲイン k_{Px} を設定し、P コントローラによるリンク 1 の角度制御を行う. ただし、 θ_{dx} はあまり大きく設定しないようにする. たとえば、 $k_{Px}=20$ 、 $\theta_{dx}=0.2$ とする.
- 2. 1) で設定した k_{Px} , θ_{dx} を用いて実機実験を行い, $\theta_x(t)$ をデータ列 θ_x^{data} として取得する.
- 3. 2) で取得したデータ θ_x^{data} の最大値 $\max \theta_x^{\text{data}}$ とそのときの時間 t_{px}^{data} を求める.
- 4. γ_x , δ_x の同定値を以下の式により導出する:

$$\gamma_x^{\text{data}} = -\frac{1}{t_{px}^{\text{data}}} \log_e \left(\frac{\max \theta_x^{\text{data}}}{\theta_{dx}} - 1 \right)$$
 (4.8)

$$\delta_x^{\text{data}} = \frac{\pi}{t^{\text{data}}} \tag{4.9}$$

5. 固有角周波数 ω_{nx} , 減衰係数 ζ_x の同定値を以下で定める:

$$\omega_{nx}^{\text{data}} = \sqrt{(\gamma_x^{\text{data}})^2 + (\delta_x^{\text{data}})^2} \tag{4.10}$$

$$\zeta_x^{\text{data}} = \frac{\gamma_x^{\text{data}}}{\omega_{nx}^{\text{data}}} \tag{4.11}$$

6. a_x , b_x の同定値 a_x^{data} , b_x^{data} を次式により定める:

$$a_x^{\text{data}} = 2\zeta_x^{\text{data}} \omega_{nx}^{\text{data}} \tag{4.12}$$

$$a_x^{\text{data}} = 2\zeta_x^{\text{data}} \omega_{nx}^{\text{data}}$$

$$b_x^{\text{data}} = \frac{(\omega_{nx}^{\text{data}})^2}{k_{Px}}$$

$$(4.12)$$

なお、未知パラメータ a_y 、 b_y の同定手順は a_x 、 b_x の同定手順と同様なので、ここでは省略する.

ステップ 1:まず、MATLAB/Simulink を起動し、以下の M ファイル "idarm.m" と実機実験モデル "ex.P.slx" を作 成し、フォルダ ¥ID に保存する.

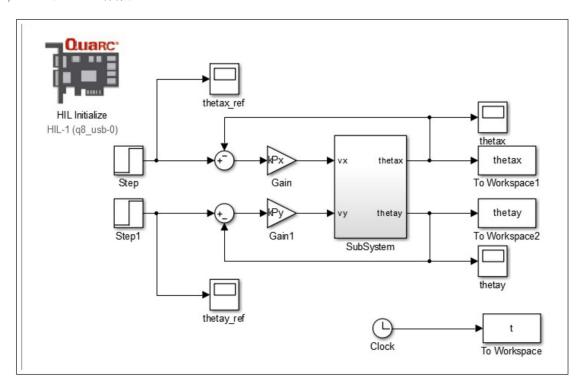


図 4.1: P 制御の Simulink モデル (実機実験モデル "ex_P.slx")

ステップ 2: ステップ 1 の ¥ID をカレントフォルダとして、実機実験モデル "ex.P.slx" をコンパイルする.

ステップ 2: ステップ 1 の ¥ID をカレントフォルダとして、実機実験モデル "ex.P.slx" をコンパイルする.

ステップ ${f 3}$: モータ軸の角度 ${f heta}_x(t)$ と ${f heta}_y(t)$ が ${f 0}$ [rad] となるように ${f P}$ 制御する.実機実験モデル "ex. ${f P}$.slx" のブロッ ク "Step", "Step1" をダブルクリックし,

Step
$$(\theta_x^{\text{ref}}(t))$$
:
$$\begin{cases} \text{ステップ時間: 0} \\ \text{初期値: 0} \\ \text{最終値: 0} \\ \text{サンプル時間: 0} \end{cases}$$
, Step1 $(\theta_y^{\text{ref}}(t))$:
$$\begin{cases} \text{ステップ時間: 0} \\ \text{初期値: 0} \\ \text{最終値: 0} \\ \text{サンプル時間: 0} \end{cases}$$

のように変更して,モータ軸の目標角度 $\theta_x^{\mathrm{ref}}(t)$, $\theta_y^{\mathrm{ref}}(t)$ を設定する.ターゲットに接続し,実行してアーム角度が 0になっていることを確認する.

ステップ 4:実機実験モデル "ex.P.slx" のブロック "Step", "Step1" をダブルクリックし,

Step
$$(\theta_x^{\text{ref}}(t))$$
:
$$\begin{cases} \text{ステップ時間: 0} \\ \text{初期値: 0} \\ \text{最終値: 0.2} \end{cases}$$
, Step1 $(\theta_y^{\text{ref}}(t))$:
$$\begin{cases} \text{ステップ時間: 0} \\ \text{初期値: 0} \\ \text{最終値: 0.2} \end{cases}$$
 サンプル時間: 0

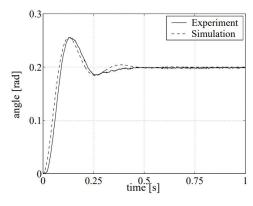
のように変更して,モータ軸の目標角度 $\theta_x^{\rm ref}(t)$, $\theta_y^{\rm ref}(t)$ を設定する. ステップ 5: MATLAB Command Window で M ファイル "idarm.m" を実行する.

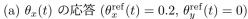
4.2 実験結果

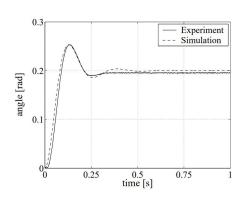
>> idarm

ax = 40.9262 $a_x = 40.9262$ $b_x = 76.7858$ $b_x = 76.7858$ $a_y = 42.1695$ $a_y = 75.7744$ $b_y = 75.7744$

図 4.2 に示すように、実験データと同定された値を用いたシミュレーションデータが一致していることが確認できた.







(b) $\theta_y(t)$ の応答 $(\theta_x^{\text{ref}}(t) = 0, \, \theta_y^{\text{ref}}(t) = 0.2)$

図 4.2: P コントローラを用いたときのステップ応答 $(k_{Px}=20,\ k_{Py}=20)$

4.3 考察

実験結果より、未知パラメータ a_x , b_x , a_y , b_y を正確に同定できたことが確認できた. しかし、定常偏差が残っていることが確認できた. これは、P コントローラの特性に起因するものである.

第5章 角度制御

実験内容 5.1

P 制御 5.1.1

5.1.2パラメータ設定

4章で述べたように、P コントローラ

$$v_x(t) = k_{Px}e_x(t), \quad e_x(t) = \theta_x^{\text{ref}}(t) - \theta_x(t)$$

 $v_y(t) = k_{Py}e_y(t), \quad e_y(t) = \theta_y^{\text{ref}}(t) - \theta_y(t)$ (5.1)

を用いると、 $\theta_x^{\text{ref}}(s)$ から $\theta_x(s)$ への伝達関数は 2 次遅れ要素

$$\begin{cases}
T_x(s) = \frac{\omega_{nx}^2}{s^2 + 2\zeta_x \omega_{nx} s + \omega_{nx}^2} \\
T_y(s) = \frac{\omega_{ny}^2}{s^2 + 2\zeta_y \omega_{ny} s + \omega_{ny}^2}
\end{cases}$$
(5.2)

となる. ただし、

固有角周波数: $\omega_{nx}=\sqrt{b_xk_{Px}},\quad \omega_{ny}=\sqrt{b_yk_{Py}}$ 減衰係数: $\zeta_x=\frac{a_x}{2\omega_{nx}}=\frac{a_x}{2\sqrt{b_xk_{Px}}},\quad \zeta_y=\frac{a_y}{2\omega_{ny}}=\frac{a_y}{2\sqrt{b_yk_{Py}}}$ である. したがって,P コントローラで指定できるのは,固有角周波数 $\omega_{nx},\;\omega_{ny}$ か減衰係数 $\zeta_x,\;\zeta_y$ のいずれかで

ある.

たとえば, 固有角周波数 ω_{nx} , ω_{ny} を指定した値 ω_{Mx} , ω_{My} とするとには, 比例ゲイン k_{Px} , k_{Py} を

$$\begin{cases}
k_{Px} = \frac{\omega_{Mx}^2}{b_x} \\
k_{Py} = \frac{\omega_{My}^2}{b_y}
\end{cases}$$
(5.4)

とすればよいが, ω_{Mx},ω_{My} を大きくするにつれて比例ゲイン $k_{Px},\ k_{Py}$ が大きくなり,減衰係数 ζ_x,ζ_y を零に近づけ てしまうため、振動的な応答となってしまう.

また,減衰係数 ζ_x,ζ_y を指定した値(たとえば ζ_{Mx},ζ_{My})とするとには,比例ゲイン $k_{Px},\ k_{Py}$ を

$$\begin{cases} k_{Px} = \frac{a_x^2}{4\zeta_{Mx}^2 b_x} \\ k_{Py} = \frac{a_y^2}{4\zeta_{My}^2 b_y} \end{cases}$$
 (5.5)

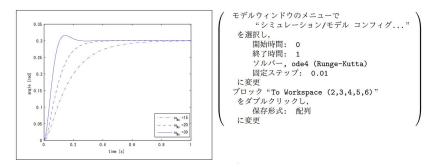
とすればよいが、固有角周波数 ω_{nx} , ω_{ny} が決まってしまい、速応性を考慮することはできない.

5.1.3 シミュレーションと実験

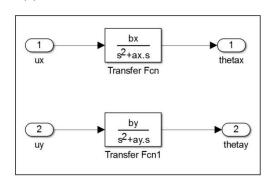
ステップ 1 : MATLAB/Simulink を起動し、カレントディレクトリを ¥Pcont に移動する. つぎに, 4.3 節で定め たパラメータを保存した MAT ファイル "armpara.mat", (5.4) 式にしたがって P コントローラを設計する M ファイル "armP.m", シミュレーションモデル "sim_P.slx"(図??), 実機実験モデル "ex_P.slx"(図 5.1) を作成し, C:\robot\Pcont に保存する. ただし, 目標値は

$$\text{Step}\left(\theta_x^{\text{ref}}(t)\right): \begin{cases} \text{ステップ時間:0} \\ \text{初期値:0} \\ \text{最終値:0.3} \\ \text{サンプル時間:0} \end{cases}, \quad \text{Step1}\left(\theta_y^{\text{ref}}(t)\right): \begin{cases} \text{ステップ時間:0} \\ \text{初期値:0} \\ \text{最終値:0} \\ \text{サンプル時間:0} \end{cases}$$
 (5.6)

と設定する.



(a) シミュレーションモデル "sim_P.slx"



(b) Subsystem "2D Robot Model" の内容

図 5.1: P 制御の Simulink モデル

モデルウィンドウのメニューで"シミュレーション/モデル コンフィグ..."を選択し,

- 開始時間:0
- 終了時間:1
- ・ ソルバー:ode4 (Runge-Kutta)
- 固定ステップ:0.01

に変更. ブロック "To Workspace (2,3,4,5,6)" をダブルクリックし, 保存形式を 配列 に変更する.

ステップ 2 : "armP_sim.m" を実行し、図 5.1 (a) のシミュレーション結果を取得する.

| ステップ 3 | : $\omega_{Mx}=15$, $\omega_{My}=15$ としたときの P コントローラを設計するため,M ファイル "armP.m" を実行する.その結果,以下の実行結果が得られる.

armP.m の実行結果

>> armP

各パラメータを設定して下さい

omegaMx = 15

omegaMy = 15

kPx =

2.9302

kPy =

2.9693

つぎに、設計された P コントローラを用いて、"ex_p.slx"を実行し、角度制御の実機実験を行う. 得られた MAT ファイル "thetax.mat" の名前を "thetax15.mat" に変更する.

| ステップ 4 | : アームの角度を 0 にし、ステップ 3 において $\omega_{Mx}=20$ 、 $\omega_{My}=20$ と指定し、同様の作業を行う.ただし、得られた MAT ファイル "thetax.mat" の名前を "thetax20.mat" に変更する.

| ステップ 5 | : アームの角度を 0 にし,ステップ 3 において $\omega_{Mx}=30$, $\omega_{My}=30$ と指定し,同様の作業を行う.ただし,得られた MAT ファイル "thetax.mat" の名前を "thetax30.mat" に変更する.

ステップ 6 : MATLAB Command Window で M ファイル "plot_figure.m" を実行する.

5.1.4 P-D 制御

5.1.5 パラメータ設定

P-D コントローラ (微分先行型 PD コントローラ)

$$\begin{cases}
v_x(t) = k_{Px}e_x(t) - k_{Dx}\frac{d\theta_x(t)}{dt} \\
v_y(t) = k_{Py}e_y(t) - k_{Dy}\frac{d\theta_y(t)}{dt}
\end{cases}
\iff
\begin{cases}
v_x(s) = k_{Px}e_x(s) - k_{Dx}s\theta_x(s) \\
v_y(s) = k_{Py}e_y(s) - k_{Dy}s\theta_y(s)
\end{cases}$$
(5.7)

を用いると、 $\theta_x^{\mathrm{ref}}(s)$ から $\theta_x(s)$ への伝達関数は 2 次遅れ要素

$$\begin{cases}
T_x(s) = \frac{\omega_{nx}^2}{s^2 + 2\zeta_x \omega_{nx} s + \omega_{nx}^2} \\
T_y(s) = \frac{\omega_{ny}^2}{s^2 + 2\zeta_y \omega_{ny} s + \omega_{ny}^2}
\end{cases}$$
(5.8)

となる. ただし,

である。したがって,P–D 制御では比例ゲイン k_{Px},k_{Py} により速応性に関するパラメータ ω_{nx},ω_{ny} を指定し,微分ゲイン k_{Dx},k_{Dy} により減衰性に関するパラメータ ζ_x,ζ_y を指定することができる。つまり,固有角周波数 ω_{nx},ω_{ny} および減衰係数 ζ_x,ζ_y を指定した値 $\omega_{Mx},\omega_{My},\zeta_{Mx},\zeta_{My}$ とするには,

$$\begin{cases} k_{Px} = \frac{\omega_{Mx}^2}{b_x}, & k_{Dx} = \frac{2\zeta_{Mx}\omega_{Mx} - a_x}{b_x} \\ k_{Py} = \frac{\omega_{My}^2}{b_y}, & k_{Dy} = \frac{2\zeta_{My}\omega_{My} - a_y}{b_y} \end{cases}$$
(5.10)

なお、ポテンショメータによって検出された角度には高周波成分の観測雑音(ノイズ)が含まれているため、検出された角度をもとに角速度を算出すると、インパルス状の成分を含んでしまう。そこで、実際には、検出された角度を 1 次のローパスフィルタ

$$G_{fx}(s) = \frac{1}{1 + T_{dx}s}, \quad G_{fy}(s) = \frac{1}{1 + T_{dy}s}$$
 (5.1)

に通して高周波成分の観測雑音を除去した後、角度信号を微分する必要がある. 以上のことを考慮すると、P-D コントローラは次式のようになる.

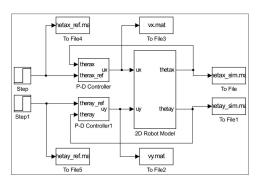
$$\begin{cases} v_x(s) = k_{Px}e_x(s) - \frac{k_{Dx}s}{1 + T_{dx}s}\theta_x(s) \\ v_y(s) = k_{Py}e_y(s) - \frac{k_{Dy}s}{1 + T_{dy}s}\theta_y(s) \end{cases}$$
(5.11)

5.1.6 シミュレーションと実験

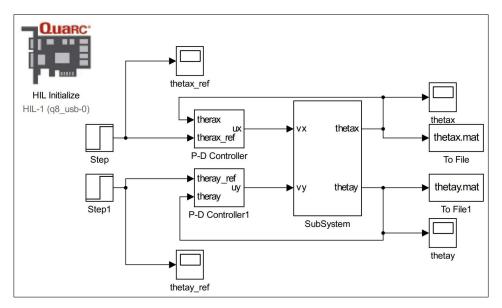
| ステップ 1 | : パラメータを記述した M ファイル "armpara.m" および (5.11) 式にしたがって P–D コントローラのパラメータを設計する M ファイル "armPD.m", シミュレーションモデル "sim_PD.slx" (図 5.3 (a)), 実機実験モデル "ex_PD.slx" (図 5.3 (b)) を作成し、C:\robot\PDcont に保存する.

 $oxed{oxed}$ ステップ $oxed{2}$: アームの角度を 0 にし, $\omega_{Mx}=30$, $\zeta_{Mx}=0.7$ と指定し,実験する.ただし,得られた MAT ファイル "thetax.mat" の名前を "thetax7.mat" に変更する.

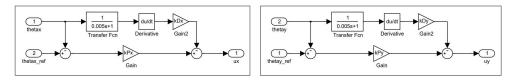
| ステップ 3 | : アームの角度を 0 にし, $\omega_{Mx}=30$, $\zeta_{Mx}=1.0$ と指定し,実験する.ただし,得られた MAT ファイル "thetax.mat" の名前を "thetax1.mat" に変更する.



(a) シミュレーションモデル "sim_PD.slx"



(b) 実機実験モデル "ex_PD.slx"



(c) Subsystem "PD Controller", "PD Controller1" の内容

図 5.2: P-D 制御の Simulink モデル

5.1.7 I-PD 制御

5.1.8 パラメータ設定

P 制御や P–D 制御はコントローラに積分器 1/s を含んでいないため,クローン摩擦の影響でステップ応答に定常偏差が生じた.そこで,コントローラに積分器 1/s を含ませることによって,ステップ状の目標値に対する定常偏差を解消することを考える.

I-PD コントローラ(比例・微分先行型 PID コントローラ)

$$\begin{cases} v_x(t) = -k_{Px}\theta_x(t) + k_{Ix} \int_0^t e_x(\tau)d\tau - k_{Dx}\frac{d\theta_x(t)}{dt} \\ v_y(t) = -k_{Py}\theta_y(t) + k_{Iy} \int_0^t e_y(\tau)d\tau - k_{Dy}\frac{d\theta_y(t)}{dt} \end{cases} \iff \begin{cases} v_x(s) = -k_{Px}\theta_x(s) + \frac{k_{Ix}}{s}e_x(s) - k_{Dx}s\theta_x(s) \\ v_y(s) = -k_{Py}\theta_y(s) + \frac{k_{Iy}}{s}e_y(s) - k_{Dx}s\theta_y(s) \end{cases}$$
(5.12)

を用いると、 $\theta_x^{ref}(s)$ から $\theta_x(s)$ への伝達関数は 3 次遅れ要素

$$\begin{cases}
T_x(s) = \frac{b_x k_{Ix}}{s^3 + (a_x + b_x k_{Dx})s^2 + b_x k_{Px}s + b_x k_{Ix}} \\
T_y(s) = \frac{b_y k_{Iy}}{s^3 + (a_y + b_y k_{Dx})s^2 + b_y k_{Py}s + b_y k_{Iy}}
\end{cases}$$
(5.13)

となる. したがって, (5.13) 式を規範モデル

$$\begin{cases}
T_{Mx}(s) = \frac{\omega_{Mx}^3}{s^3 + \alpha_{Mx2}\omega_{Mx}^2 s^2 + \alpha_{Mx1}\omega_{Mx} s + \omega_{Mx}^3} \\
T_{My}(s) = \frac{\omega_{My}^3}{s^3 + \alpha_{My2}\omega_{My}^2 s^2 + \alpha_{My1}\omega_{My} s + \omega_{My}^3}
\end{cases}$$
(5.14)

と完全に一致させるには

$$\begin{cases} k_{Ix} = \frac{\omega_{Mx}^3}{b_x}, & k_{Px} = \frac{\alpha_{Mx1}\omega_{Mx}^2}{b_x}, & k_{Dx} = \frac{\alpha_{Mx2}\omega_{Mx} - a_x}{b_x} \\ k_{Iy} = \frac{\omega_{My}^3}{b_y}, & k_{Py} = \frac{\alpha_{My1}\omega_{My}^2}{b_y}, & k_{Dx} = \frac{\alpha_{My2}\omega_{My} - a_y}{b_y} \end{cases}$$
(5.15)

と選べばよい. ただし、 ω_{Mx} 、 ω_{My} は速度応答に関するパラメータ、 α_{M1x} , α_{M2x} , α_{M1y} , α_{M2y} は減衰性に関するパラメータであり、

規範モデルの標準形

パターワース標準形:

$$\begin{cases} \alpha_{M1x} = 2, & \alpha_{M2x} = 2\\ \alpha_{M1y} = 2, & \alpha_{M2y} = 2 \end{cases}$$

二項標準形:

$$\begin{cases} \alpha_{M1x} = 3, & \alpha_{M2x} = 3\\ \alpha_{M1y} = 3, & \alpha_{M2y} = 3 \end{cases}$$

ITAE 最小標準形:

$$\begin{cases} \alpha_{M1x} = 2.15, & \alpha_{M2x} = 1.75\\ \alpha_{M1y} = 2.15, & \alpha_{M2y} = 1.75 \end{cases}$$

が用いられることが多い.

なお, 実際には高周波成分の観測雑音を除去するため, 次式の I-PD コントローラを用いることになる:

$$\begin{cases} v_x(s) = -k_{Px}\theta_x(s) + \frac{k_{Ix}}{s}e_x(s) - \frac{k_{Dx}s}{1 + T_{dx}s}\theta_x(s) \\ v_y(s) = -k_{Py}\theta_y(s) + \frac{k_{Iy}}{s}e_y(s) - \frac{k_{Dy}s}{1 + T_{dy}s}\theta_y(s) \end{cases}$$
(5.16)

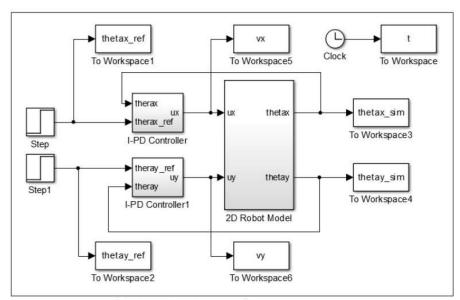
5.1.9 シミュレーションと実験

| ステップ 1 | : パラメータを記述した M ファイル "armpara.m" および (5.15) 式により I–PD コントローラのパラメータを設計する M ファイル "armIPD.m", シミュレーションモデル "sim_IPD.slx" (図 5.5 (a)), 実機実験モデル "ex_IPD.slx" (図 5.5 (b)) を作成し、C:\robot\IPDcont に保存する.

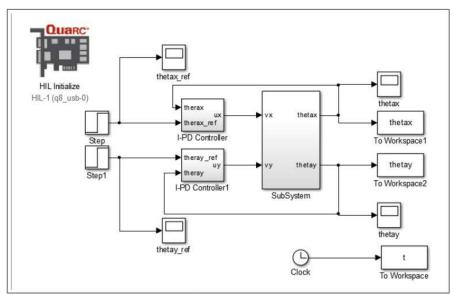
| ステップ 2 | : アームの角度を 0 にし、 $\omega_{Mx}=30$ 、 $\alpha_{M1x}=2$ 、 $\alpha_{M2x}=2$ と指定し、実験する. ただし、得られた MAT ファイル "thetax.mat" の名前を "thetaxb.mat" に変更する.

ステップ 3 : アームの角度を 0 にし、 $\omega_{Mx}=30$ 、 $\alpha_{M1x}=3$ 、 $\alpha_{M2x}=3$ と指定し、実験する. ただし、得られた MAT ファイル "thetax.mat" の名前を "thetax2.mat" に変更する.

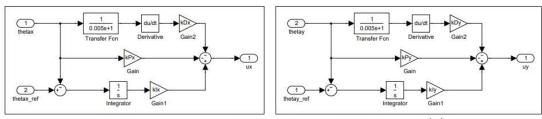
| ステップ 4 | : アームの角度を 0 にし、 $\omega_{Mx}=30$ 、 $\alpha_{M1x}=2.15$ 、 $\alpha_{M2x}=1.75$ と指定し、実験する. ただし、得られた MAT ファイル "thetax.mat" の名前を "thetaxi.mat" に変更する.



(a) シミュレーションモデル "sim_IPD.slx"



(b) 実機実験モデル "ex_IPD.slx"



(c) Subsystem "I-PD Controller", "I-PD Controller1"の内容

図 5.3: I–PD 制御の Simulink モデル

5.2 実験結果

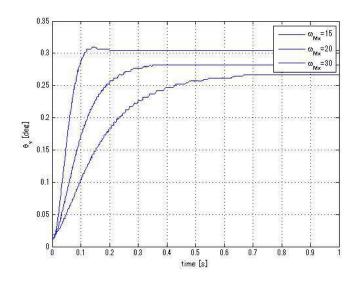


図 5.4: P制御の応答

図 5.4 に示すように、P 制御では速応性が改善される一方でオーバーシュートが大きくなることが確認された.

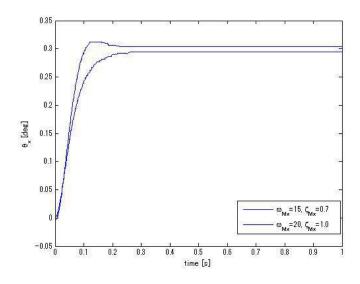


図 5.5: P-D 制御の応答

また、図 5.5 に示すように、P-D 制御では安定度が改善され、たが定常偏差が残るようになった.

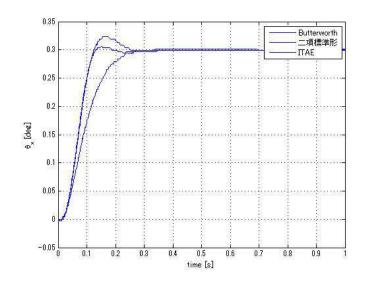


図 5.6: I-PD 制御の応答

図 5.6 に示すように、I-PD 制御では定常偏差が解消された.

5.3 考察

P 制御では速応性が向上するが,オーバーシュートが大きくなるため,減衰係数の調整が必要である.P-D 制御では安定度が向上し,振動が抑制された.さらに,I-PD 制御では定常偏差が解消され,目標値への追従性が向上した.

第6章 手先位置制御

6.1 順運動学と逆運動学

ここでは、手先位置 (x(t),y(t)) をその目標値 $(x^{ref}(t),y^{ref}(t))$ に追従させる制御を考える.

手先 P_3 の座標 (x(t),y(t)) を目標値 $(x^{\text{ref}}(t),y^{\text{ref}}(t))$ に追従させるためには、2.3 節で述べたように、逆運動学により角度の目標値 $\theta_x^{\text{ref}}(t),\theta_y^{\text{ref}}(t)$ を

$$\begin{cases}
\theta_x^{\text{ref}}(t) = \sin^{-1}\left(\frac{\sqrt{x^{\text{ref}}(t)^2 + y^{\text{ref}}(t)^2}}{2\ell}\right) + \tan^{-1}\left(\frac{y^{\text{ref}}(t)}{x^{\text{ref}}(t)}\right) \\
\theta_y^{\text{ref}}(t) = \sin^{-1}\left(\frac{\sqrt{(x^{\text{ref}}(t) - 2\ell)^2 + y^{\text{ref}}(t)^2}}{2\ell}\right) - \tan^{-1}\left(\frac{x^{\text{ref}}(t) - 2\ell}{y^{\text{ref}}(t)}\right)
\end{cases}$$
(6.1)

と設定すればよい.

たとえば I-PD コントローラ (比例・微分先行型 PID コントローラ)

$$\begin{cases} v_x(t) = -k_{Px}\theta_x(t) + \frac{k_{Ix}}{s}e_x(t) - k_{Dx}\frac{d\theta_x(t)}{dt} \\ v_y(t) = -k_{Py}\theta_y(t) + \frac{k_{Iy}}{s}e_y(t) - k_{Dy}\frac{d\theta_y(t)}{dt} \end{cases}$$
(6.2)

を用いると、 $\theta_x(t)$ 、 $\theta_y(t)$ をその目標値に追従させることができ、その結果、2.2 節で述べたように、順運動学により手先位置 (x(t),y(t)) は次式のようになる:

$$\begin{cases} x(t) = h(t)\cos(\theta_x(t) - \alpha_x(t)) - \frac{d(t)}{2}\sin(\theta_x(t) - \alpha_x(t)) + \ell\sin\theta_x(t) \\ y(t) = h(t)\sin(\theta_x(t) - \alpha_x(t)) + \frac{d(t)}{2}\cos(\theta_x(t) - \alpha_x(t)) - \ell\cos\theta_x(t) \end{cases}$$

$$(6.3)$$

ただし,

$$\begin{cases}
d(t) = \sqrt{(p_{2x}(t) - p_{4x}(t))^2 + (p_{2y}(t) - p_{4y}(t))^2} \\
h(t) = \sqrt{\ell^2 - \left(\frac{d(t)}{2}\right)^2} \\
\alpha_x(t) = \cos^{-1}\left(\frac{\ell^2 + d(t)^2 - (p_{4x}(t)^2 + p_{4y}(t)^2)}{2\ell d}\right) \\
p_{2x}(t) = \ell \sin \theta_x(t), \quad p_{2y}(t) = -\ell \cos \theta_x(t) \\
p_{4x}(t) = 2\ell - \ell \cos \theta_y(t), \quad p_{4y}(t) = -\ell \sin \theta_y(t)
\end{cases}$$
(6.4)

である.

図 6.1 に手先位置 (x(t),y(t)) をその目標値 $(x^{\text{ref}}(t),y^{\text{ref}}(t))$ に追従させるフィードバック制御系のブロック線図を示す.

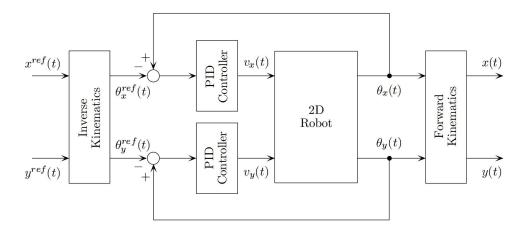
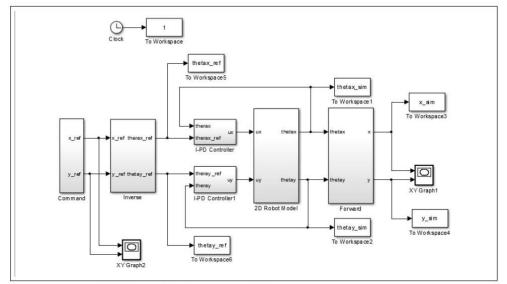


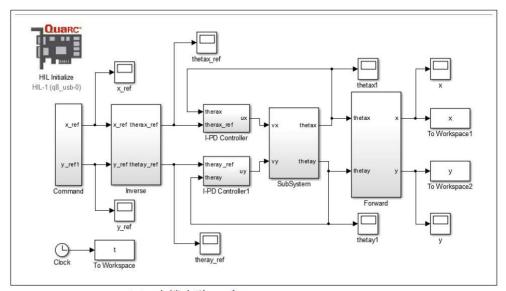
図 6.1: フィードバック制御系

6.2 シミュレーションと実験(目標値が一定値の場合)

ステップ 1 : 5.1.2 節で示した "armpara.m", 5.3.2 節で示した "armIPD.m" およびシミュレーション結果をアニメーション表示する以下の M ファイル "sim_anime.m" を作成し、\xy に保存する. また、シミュレーションモデル "sim_robot_xy.slx" (図 6.2(a))、実機実験モデル "ex_robot_xy.slx" (図 6.2(b)) を作成し、\xy に保存する. ただし、各 Subsystem の内容は以下に示すとおりである.

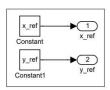


(a) シミュレーションモデル "sim_robot_xy.slx"



(b) 実機実験モデル "ex_robot_xy.slx"

図 6.2: 手先位置制御(目標値が一定値の場合)

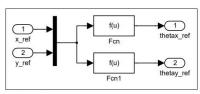


[t_data,x_ref_data]

(a1) Subsystem "Command" の内容

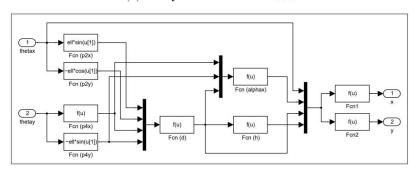
('sim_robot_xy.slx", "ex_robot_xy.slx")

(a2) Subsystem "Command" の内容 ("sim_robot_xy2.slx", "ex_robot_xy2.slx")



(Fcn: Expressionを "asin(sqrt(u[1]^2+u[2]^2)/(2*ell)) + atan(u[2]/u[1])"に変更 Fcn1: Expressionを "asin(sqrt((u[1]-2*ell)^2+u[2]^2)/(2*ell)) - atan((u[1]-2*ell)/u[2])"に変更

(b) Subsystem "Inverse" の内容



```
Fcn (p2x): Expression を "ell*sin(u[1])" に変更
Fcn (p2y): Expression を "-ell*cos(u[1])" に変更
Fcn (p4x): Expression を "2*ell-ell*cos(u[1])" に変更
Fcn (p4y): Expression を "-ell*sin(u[1])" に変更
Fcn (p4y): Expression を "-ell*sin(u[1])" に変更
Fcn (alphax): Expression を "acos((ell^2 + u[3]^2 - (u[1]^2 + u[2]^2))/(2*ell*u[3]))" に変更
Fcn (d): Expression を "sqrt((u[1]-u[3])^2+(u[2]-u[4])^2)" に変更
Fcn (h): Expression を "sqrt(ell^2 - (u[1]/2)^2)" に変更
Fcn1: Expression を "u[4]*cos(u[1]-u[2])-(u[3]/2)*sin(u[1]-u[2])+ell*sin(u[1])" に変更
Fcn2: Expression を "u[4]*sin(u[1]-u[2])+(u[3]/2)*cos(u[1]-u[2])-ell*cos(u[1])" に変更
```

(c) Subsystem "Forward" の内容

図 6.3: Subsystem "Command", "Inverse", "Forward" の構成(図 6.3)

ステップ 2 : まず, MATLAB Command Window で

>> armIPD

各パラメータを設定して下さい

omegaMx = 20

omegaMy = 20

… (略) …

alphaM1x = 2

alphaM2x = 2

alphaM1y = 2

alphaM2y = 2

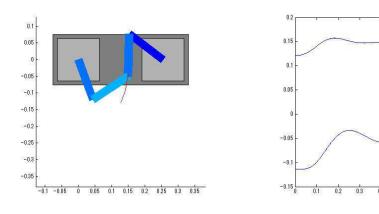
… (略) …

 $x_ref = 0.15; y_ref = -0.05;$

と入力し、パラメータを設定する. つぎに、シミュレーションを開始し、シミュレーション終了後に以下のように入力して結果をアニメーション表示する.

>> sim_anime;

アニメーション(図 6.4 (a))によって各リンクに無理な動きがないことを確認した後、"ex_robot_xy.slx" をコンパイルしてから実機実験を行うと、図 6.4 (b) の実験結果が得られる.



(a) シミュレーション結果のアニメーション表示

(b) 実験結果

図 6.4 : 手先位置制御 $(x^{ref} = 0.15 \text{ [m]}, y^{ref} = -0.05 \text{ [m]})$

6.3 シミュレーションと実験 (目標値をデータで与える場合)

6.3.1 目標値の与え方

ここでは、目標値を以下のようにデータ列で与え、手先位置制御を行うことを考える.

```
1 t_data = [0; 1; 2; 3; 4];
2 x_ref_data = [0.1; 0.2; 0.2; 0.1; 0.1];
3 y_ref_data = [-0.15; -0.15; -0.05; -0.05; -0.15];
```

なお、このようにデータ列で目標値を与えたとき、図 6.5 のようになる.

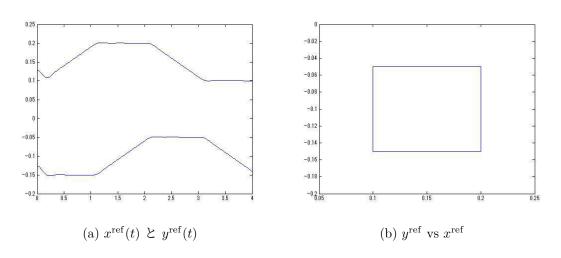


図 6.5: データ列で与えられた手先の目標位置

6.3.2 デモンストレーション

ここでは,花の絵を描くような目標位置データを用いた手先位置制御のデモンストレーションを行う.このデータは M ファイル "flower_data.m" に含まれており, $(x^{\mathrm{ref}}(t),y^{\mathrm{ref}}(t))$ の時系列データとして定義されている.この目標位置に 追従する様子をアニメーション表示するために,MATLAB Command Window で以下のように入力する.

```
flower_data % flower_data.m の実行 (手先位置の目標値設定)

figure(1); plot(t_data,x_ref_data);

xlabel('time [s]'); ylabel('x^{ref} [m]'); % (t, x_ref(t)) のプロット

figure(2); plot(t_data,y_ref_data);

xlabel('time [s]'); ylabel('y^{ref} [m]'); % (t, y_ref(t)) のプロット

figure(3); plot(x_ref_data,y_ref_data); % (x_ref(t), y_ref(t)) のプロット

xlabel('x^{ref} [m]'); ylabel('y^{ref} [m]');

t = t_data; x = x_ref_data; y = y_ref_data;

figure(4); sim_anime % flower_anime.m の実行 (アニメーション)
```

ここでは,M ファイル "flower_data.m" に含まれている花の絵のような目標位置データを用いて,手先位置制御の動作をデモンストレーションする.このファイルには,時系列で与えられた手先の目標位置 $(x^{\rm ref}(t),y^{\rm ref}(t))$ が含まれており,それを基にアニメーション表示およびグラフ出力を行う.MATLAB Command Window で以下のように入力すればよい.

```
flower_data % flower_data.m の実行 (手先位置の目標値設定)

figure(1); plot(t_data,x_ref_data);

xlabel('time [s]'); ylabel('x^{ref} [m]'); % (t, x_ref(t)) のプロット

figure(2); plot(t_data,y_ref_data);

xlabel('time [s]'); ylabel('y^{ref} [m]'); % (t, y_ref(t)) のプロット

figure(3); plot(x_ref_data,y_ref_data); % (x_ref(t), y_ref(t)) のプロット

xlabel('x^{ref} [m]'); ylabel('y^{ref} [m]');

t = t_data; x = x_ref_data; y = y_ref_data;

figure(4); sim_anime % flower_anime.m の実行 (アニメーション)
```

その結果、図 6.6 に示すような時系列グラフおよびアニメーション表示が得られる.

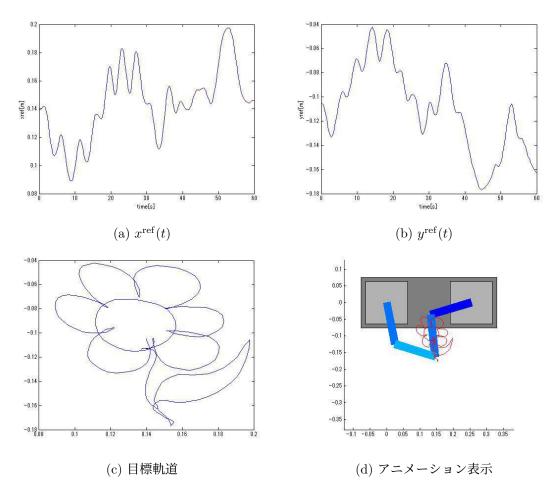


図 6.6: flower_data.m により設定された手先の目標位置

この花の絵の目標値データを利用して実験を行うために、MATLAB Command Window で以下のように入力し、パラメータ設定を行う.

```
armIPD各パラメータを設定して下さい
1
2
3
      omegaMx = 20
4
      omegaMy = 20
     .....《略》
alphaM1x = 2
5
6
7
      alphaM2x = 2
      alphaM1y = 2
8
      alphaM2y = 2
9
10
                                                    《略》
      flower_data % flower_data.m の実行 (手先位置の目標値設定)
11
```

つぎに、"sim_robot_xy2.slx" によりシミュレーションを実行する。M ファイル sim_anime を実行してアニメーションで各リンクに無理な動きがないことを確認した後、"ex_robot_xy2.slx" をコンパイルしてから実機実験を行うと、図 6.7 の実験結果が得られる。

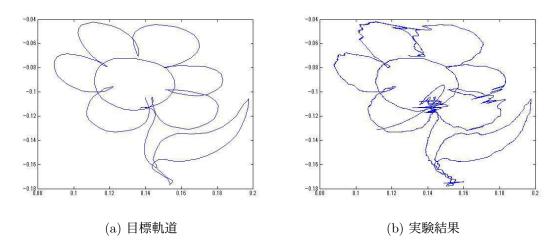


図 6.7: 手先位置制御

第7章 ダイレクトティーチング

7.1 実験内容

7.1.1 手順

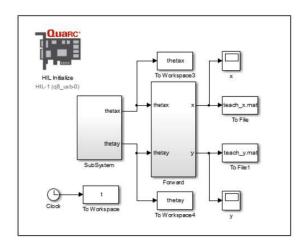
ダイレクトティーチングとは、手動で手先を動かし、2 軸ロボットにその動きを再現させることである。ダイレクトティーチングを行うためには、以下のステップを実行すればよい。

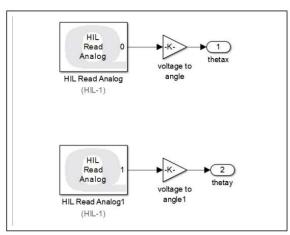
ステップ 1 手先位置 P_3 が所望の軌道に沿うように手先を手で動かし、関節角 $\theta_x(t)$ 、 $\theta_y(t)$ (あるいは手先位置 x(t)、y(t))をデータとして取得する.

ステップ 2 ステップ 1 で取得した教師データを目標値 $\theta_x^{\text{ref}}(t)$, $\theta_y^{\text{ref}}(t)$ (あるいは $x^{\text{ref}}(t)$, $y^{\text{ref}}(t)$) として手先位置 (x(t), y(t)) の動きを再現する.

7.1.2 教師データの取得

教師データを取得するため、図 7.1 に示す実機実験モデル "ex_robot_teach.slx" を作成し、¥ teach に保存する. M ファイル "armpara.m"、?? 節で示した M ファイル "armIPD.m"、 "sim_anime.m" および "sim_robot_xy2.slx"、"ex_robot_xy2.slx"を¥ teach に保存する.





(a) 実機実験モデル "ex_robot_teach.slx"

(b) Subsystem "2D Robot" の内容

図 7.1: 教師データ取得のための実機実験モデル "ex_robot_teach.slx"

つぎに、"ex_robot_teach.slx" はデータ取得は 30 秒間であることに注意し、"Start" アイコンをクリックした後、所望の軌道に沿うように手先を動かす.実験終了後、プロットされたデータが "teach_x.mat", "teach_y.mat" という名前で \teach に保存されていることを確認する.

以上の作業が終了した後、MATLAB Command Window で

```
load teach_x;
load teach_y;

x_ref_data = teach_x(2,:); % x_ref の取得

y_ref_data = teach_y(2,:); % y_ref の取得

t_data = teach_x(1,:);

figure(1); plot(t_data,x_ref_data,t_data,y_ref_data);

xlabel('time [s]'); ylabel('\formula {it x}^{ref} [m] and \formula {it x}^{ref} [m]');
```

のように入力すると、取得された教師データが図7.2のように表示される.

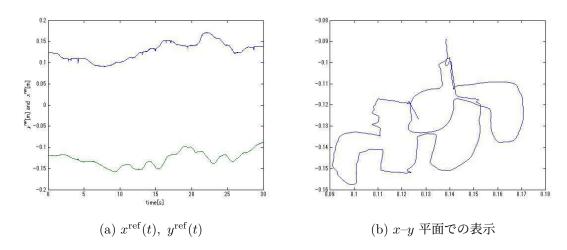


図 7.2:取得された教師データ

7.1.3 シミュレーションと実験

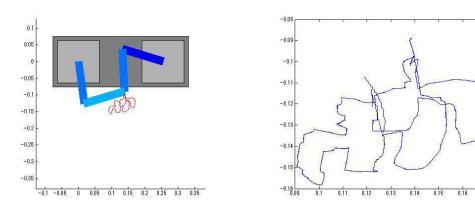
ステップ 1 で取得した教師データを目標値($x^{\text{ref}}, y^{\text{ref}}$)として "sim_robot_xy2.slx" によりシミュレーションを行い,以下のように入力してシミュレーション結果をアニメーション表示する.

1 sim_anime;

アニメーションにより各リンクに無理な動きがないことを確認した後, "ex_robot_xy2.slx" をコンパイルして実機 実験を行う.

7.2 実験結果

図 7.3a に示すように、シミュレーション結果のアニメーション表示では、手先が所望の軌道に沿って動いていることが確認できた. また、図 7.3b に示すように、実機実験でも同様の結果が得られた.



(a) シミュレーション結果のアニメーション表示

(b) ダイレクトティーチングの実験結果

図 7.3: ダイレクトティーチングにおけるアニメーションと実験結果

7.3 考察

ダイレクトティーチングでは、手動で動かした手先の軌道を正確に再現できることが確認された。シミュレーションと実機実験の結果が一致しており、制御モデルが正確であることが示された。

ただし、実機実験ではセンサの観測データに若干のノイズが含まれていることが確認された。このノイズはモーターの不感帯や外部環境の影響によるものであると考えられる。